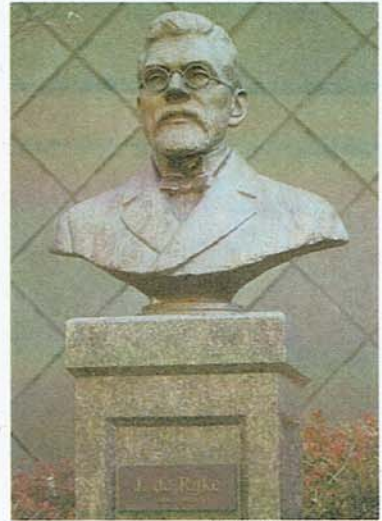


[連載]第27回 清々しき人々



Wikimedia Commons

ヨハニス・デ・レイケ(1842-1913)

日本の近代河川改修を指導した
デ・レイケ 月尾嘉男

(東京大学名誉教授・工学博士)

オランダ技師が中心
の河川改修

幕末に長州や薩摩から密航した若者や、明治になって政府の使節として欧米を視察した人々は彼らの格差に愕然とし、夏目漱石が「欧州の国々が百年かけて達成しなければならなかった」と述懐しているように、明治になって西欧の制度、文化、技術などを急速に導入する活動を開始します。そのため優秀な若者を留学させるとともに、それらの国々から学者や技師を高給で招聘し、指導を依頼してきまし

た。しかし闇雲に招聘したわけではなく、それぞれの分野で世界の先頭にある国家を見極め、例外外はありますが、法律はフランス、教育はアメリカ、医学はドイツ、軍事はフランス、鉄道はイギリスが中心という具合でした。港湾建設や河川改修については明治五年(一八七二)に技師としてC・ファン・ドールンとI・A・リンドを招聘、翌年にはG・A・エッセル、J・デ・レイケなど計一〇名が来日しますが、すべてオランダ出身です。オランダは英語でネザールラ

味です。オランダはヨーロッパ有数の大河ラインの河口部分に位置し、一三世紀以来、湿地を一〇〇年で三五〇平方キロメートルという規模で干拓してきました。干拓した土地は時間とともに沈下していくため、九州と同等の面積の国土の約二五％は標高が海面以下になっているという国家です(図1)。最近では気温上昇により海面が上昇し、オランダは深刻な状況に直面しています。これらの経緯から、干拓や治水の技術は世界最高水準にあったため、この分野はオランダから技師を招聘したのである。この国土の南端にある海沿いの寒村に一八四二年に誕生したのが今回紹介するヨハニス・デ・レイケです。堤防を建設する職人の家庭に誕生し、高等教育機関で勉強した経験はありませんが、オランダ各地で開門工事に従事し、ファン・ドールンが指揮するアムステルダム工事現場で仕事をした経験もあり日本に招聘されました。



ドが四〇〇円、三等工師チツセパンが三五〇円、四等工師デ・レイケが三〇〇円でした。明治政府の閣僚以上の役職である参議の伊藤博文の月給が五〇〇円、帝国大学講義の夏目漱石が七〇円弱でしたから、外国の技師を破格の待遇で招致していたことが明確です(図2)。

田の周辺の荒山からの土砂が瀬田川、宇治川を經由して淀川に流入しており、砂防ダムで土砂の流入を阻止しなければ淀川では船舶が通行できる水深を確保できないう結論に到達しました。そこで大学でダム工場の授業を受講していたエッセルが砂防ダムを設計し、デ・レイケが砂防ダムを建造する場所を選定していただきます。こうして淀川の土流部分に数多くの砂防ダムが建設されていきました。

淀川の河川改修に
挑戦

デ・レイケは日本に三〇年間滞在しますが、それを見越したように、一八七三年に妻子とともに来日し、内務省土木局に雇用されます。同時に来日したエッセルは大学を卒業していたため一等工師という処遇でした。しかし、優秀な技師であったエッセルが一八七八年に、全体を統率していたファン・ドールンが一八八〇年に帰国してからは、デ・レイケが内務省土木局を指導する立場になります。

その結果、琵琶湖の出口の瀬田に寄港、瀬戸内海を通過して二四日に神戸に到着しました。五日間の船旅でした。そこから陸路で大阪に移動して住居を確保し、エッセルとデ・レイケは一月から、数名の若者が両岸から引綱で牽引する小舟に乗船して淀川上流の現地調査を開始します。

木曾三川の分流を
指導

このような活躍をしていた一八七六年九月に当初の日本政府との雇用契約の期限になり、契約更新をします。エッセルは月

月尾嘉男の本

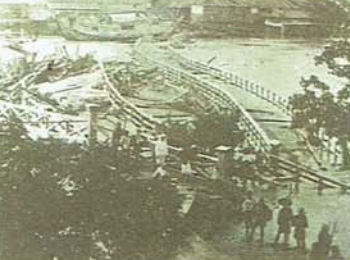
Book advertisement for '清々しき人々' by Yoshio Tsunetsuna. Includes book cover, author bio, and promotional text.

図3 分された三川
(手前より揖斐川・長良川・木曾川)



額四五〇円のままでしたが、デ・レイケは四〇〇円になり、以前より一〇〇円増額になりました。これは前述の手紙の内容のように、デ・レイケの実力を称賛したエッセルが推挙した結果でした。これ以後は雇用期限がなくなり、政府が本人が六ヶ月前に申告すれば契約解消が可能になる条件に変更されました。

図4 淀川の洪水(安治川橋)1885



その要旨は、上流から土砂が河川に流入して河床が上昇するが、木曾川の土砂量が揖斐川と長良川の土砂量の合計の約二〇倍もあるため、木曾川の水流が揖斐川と長良川に氾濫するという内容です。

不幸を克服し 三〇年間の滞日

ところが、この時期にデ・レイケの家庭に不幸が襲来します。まず一八八〇年に義妹が日本で病死し、それがオランダの新聞に報道されたため、恩師から手紙が到着し、年長の子供三人を帰国させて母国で教育することを進言されます。そこで当面、九歳の長女アンナのみが一人で帰国し、さらに翌年に長男と次男も帰国しました。さらなる不幸は病床にあった夫人のヨハンナが翌年六月に病死したことです。まだ三二歳でした。

ラングに帰国します。今回も八月月間の有給休暇を許可されませんが、これはデ・レイケの能力が評価されていた証拠です。今回はアメリカとイギリスを経由する経路で、子供たちとの再会も目的でしたが、さらに重要な目的は再婚でした。相手は家族の友人で、デ・レイケよりも七歳若いM・S・ヘックでした。先妻との子供ヤコブとともに二月に帰国した二人は、今回は東京に定住します。

この前後、デ・レイケが優秀な技師であることを証明する事象が日本で発生します。日本では河川は舟運のための航路の維持を主眼とする改修が中心で、淀川についても同様でした。その実態を視察したデ・レイケは淀川の洪水工事(洪水防壁の河川改修)の必要を指摘し、内務本省の三島通商局長に「このままでは淀川は決壊するであろう」と警告を送付してオランダに出発しました。実際、デ・レイケが不在の六月と七月に水害が発生しました(図4)。



つぎお よしお
1942年生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002・03年総務省総務審議官。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリー・スキーをしながら、知床半島、羊蹄山麓、釧路湿原、信越仰山塾、瀬戸内海塾などを主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域振興に取り組む。

新年あけまして
おめでと〜ございませす。
今年もよろしく
お願いいたします。

1月号 平成31年1月9日発行
● 編集 モルゲン編集部
● 発行 (株) 遊行社
● 印刷 北日本印刷(株)
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 5-5-1F
TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155
HP <http://yugyosha.web.fc2.com/>
MAIL morgen@vesta.ocn.ne.jp

● 配布エリア
・ 高等学校 (全国)
・ 中学校 (北海道/岩手/宮城/福島/群馬/栃木/茨城/埼玉/東京/千葉/神奈川/長野/新潟/山梨/富山/石川/福井/岡山/広島/香川/愛媛/高知/佐賀/長崎/沖縄)
・ 朝の読書実施校 (全国中・高等学校)
・ 大学・短大・専門学校・サポート校の一部

● 月刊紙 (毎月1回発行 ※7・8月は合併号)
● 定価 年間購読料 3,564円 (324円×11回)
※一部売り 540円 (税込)

Illustration: M. A.